

APHS Bali 2019 参加報告

自治医科大学附属さいたま医療センター 一般・消化器外科 辻仲眞康

この度は、APHS Scholarship 2019 に選出いただき、誠にありがとうございました。

今回の APHS は、インドネシア・バリ島屈指の高級リゾート地区であるヌサドゥアで開催されました。プログラムは、Keynote lecture, Satellite symposium, Plenary lecture, Miscellaneous session, Debate session のほか、e-poster で構成されていました。

演題登録、事前参加登録、当日の Registration、発表スライドの upload などに関し、全く問題ありませんでした。Organizing committee がしっかりと運営している印象でした。



ホットなトピックは、腹壁癒痕ヘルニアも鼠径ヘルニアも、やはり Robotic surgery の台頭でした。TAR, PPOM や eTEP などの新しい手術手技のセッションや、術前の Botulinum toxin 注入や Cyanoacrylate glue を用いたメッシュ固定、さらには Suturable mesh のデモなど、日本では目の当たりにする機会が少ない手技に出会うことができました。

参加者や演者は、インドネシアを中心とした ASEAN 諸国、中東(ほぼサウジアラビア)、ヨーロッパ (faculty が多い)、そして、インドと中国が 2 大勢力でした。彼らは人数で圧倒するばかりでなく、手術手技の進歩と発展、プレゼン能力の躍進のほか、士気に溢れていました。特に、中国は APHS をリードすべく、豊富な人材と資金を投入してきていました。次回の APHS は上海で開催されますが、迫力溢れるプロモーションビデオを誇示していました。

学会主催の Gala dinner にも参加してきました。特に、インドネシア東ジャワの民族楽器である「アングルン・バンブー」が参加者全員に配られ、皆で共にビートルズの曲を演奏する余興があり、一体感が生まれたことに感激しました。国柄か、アルコールがほとんど提供されませんでしたが、ちよっぴりスパイシーで美味しいインドネシア料理を楽しむこともできました。

アングルン・バンブー



APHS は EHS を追従し、学術的レベルや組織的ポジションが高まってきていることを強く感じました。私たちは、日本人として、あるいは JHS として、今後 APHS とどう関わっていくのか、どのような形で世界的な貢献ができるのか、を真剣に考えるときが来ていることと思います。



(左:筆者 右:同僚の前本先生)

最後になりましたが、このような貴重な経験をする機会をいただきました、JHS 国際委員会委員長の吉田先生、JHS 理事長の早川先生をはじめ、関係者の皆様に深謝いたします。